



### キャリア教育 ちよこつと研修 その20

#### 平成26年度全国キャリア教育・進路指導担当者等研究協議会 報告 —キャリア教育を通して学習意欲が高まる—

#### 1 キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査・第二次報告書の説明

先日東京で行われた全国キャリア教育・進路指導担当者等研究協議会に参加しました。この研究会では、平成24年度に実施した小学校から高等学校までのキャリア教育の実態を把握することを主眼とした「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査・第二次報告書」で明らかになったキャリア教育の現状と課題の報告があり、参加者はこれからのキャリア教育の在り方や具体的な手法・実践等について研究協議、情報交換しました。全体会での報告内容は、以下の内容でした。

- ① キャリア教育は学習意欲の向上に影響する
- ② 全体計画の策定は各校のキャリア教育を充実させる
- ③ 体験活動は児童生徒の職業への意識や学校生活への積極性を高める
- ④ 将来の諸リスクへの対応についての指導への期待が大きい

#### 2 基調講演「学習意欲の向上とキャリア教育」

基調講演は、上記のタイトルで藤田晃之氏（筑波大学人間系教授）から講演がありました。その中でも、「キャリア教育の力で学びを変える」についての説明や、氏自身が小学生を対象にキャリア教育についての授業を行ったときのエピソードについてのお話が印象的で、示唆に富む内容でした。

まず「学力」について、学力には以下に示す3つの要素があると説明されました。

- ・ 基礎的な知識及び技能
- ・ これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力
- ・ 主体的に学習に取り組む態度（＝学習意欲）

さらに TIMSS2011 や PISA から示されることについての説明がありました。日本の子どもたちは、基礎的な知識や技能の定着をはかるテストの平均得点は世界のトップレベルにいるが、数学や理科を学習することの大切さや意義に関する意識は、世界で下位にいることを示し、学習意欲の向上が大切であることを改めて強調されていました。活用力の弱さは以前から言われていることです。

そこで我々はこのように思うはずです。「じゃあ、どうすればよいの?」と。その具体的な方策として藤田氏から示されたのが「キャリア教育の力で学びを変える」です。氏によると、今の子どもたちにとって学校で学習していることは、「入試や入社試験で出るから勉強するけど、将来のことを考えれば、どうせ使わないし、意味がない。」と感じられています。

しかし、入試や入社試験で出題されるのは、今後仕事に就いたときにその力や考え方が必要だから出題されるわけです。だからこそ、我々教師が日頃の授業の中で「今習った学習内容やそれを導くために必要となった考え方や捉え方が、〇〇の時に役に立つ」と伝えることで、子ども達の学びを変えることができると氏は説明しました。

その具体例として、氏が小学生を対象に行った授業にヒントがあります。小学生の将来の夢について調査すると、男子の1位はサッカー選手だそうです。そこで、小学生に「サッカー選手になるために大切なことは何ですか?」と聞きます。小学生からたくさんの発表があった後に氏は、日本サッカー協会副会長の田嶋幸三さんのお話を紹介します。

- 日本のサッカー選手が世界に通用する強さを発揮するためには「言語技術」を高めることが必要。

例えば、試合中に短くはっきりした言葉で戦略を伝え、パスをつなぐ力。自分がミスした時に、自分のプレーの意図を説明できる力や、失敗の原因を論理的に分析する力。

- ナショナルチームのトレーニングでも「言語技術」は欠かせない。

さらには、パイロットにも言語技術が必要なことを示し、言語技術の獲得が自分の将来のために大切であることを意識させます。そこで、「国語や学級活動の時間などで、担当の先生から『自分の考えを言うときには、賛成・反対をはっきりさせてから、理由もつけて話しましょう。』と聞かされたことがあると思います。授業の中でよく聞くことが、自分の将来にとって大切なことと言えますね。」と氏は小学生に説明したそうです。

それでは中学生、高校生にはどのように指導するとよいのでしょうか? 中高生は小学生のように単純にはいきません。氏によると、「学んだ『知』と生活とのつながりの重要性」を子ども達を感じる事が大切だそうです。そのためには、地域・社会との連携の中で子どもたちが日々の生活で身近に思うことの世界を広げることで、「なるほど。役に立つな。面白い。」と感じられる工夫が必要であると、氏は言っています。つまり、外部講師の活用、企業訪問、職場体験学習、地域行事への参加など地域・企業との連携により体験を通した学びを充実させることが、学習意欲を向上させるために大切なことなのです。

このように、氏は、教科等を通じた日々の学びと地域・企業等との連携により体験を通した学びが、学校における教科等の意義の認識を深め、学習意欲の向上に資することを話してくれました。

### 3 まとめと考察

研修・協議会に参加して、本校の取組を振り返った時、中学校では1年生で職業ゼミナール、2年生で企業訪問、京都大学訪問、3年生で職場体験学習など体験を通した学びの場が充実しています。高校では各種進路講演、桐蔭リーダー塾、桐蔭総合大学など様々な学びの場があります。これらの場は、学校での学びと自分の生活や社会を結びつける工夫を加えていくことで、よりよい学習の機会とすることができるでしょう。

今年度本格実施となった「キャリア桐の葉」の授業づくりは、その視点で進んでおり、桐蔭におけるキャリア教育の方向性が間違っていないことを確認できました。また、桐蔭の学びの作成を通して、教科の学びが将来にどのように役に立っていくかを生徒に示せたことは、大いに価値のあることだとも感じました。この研修・協議会で非常に大切な学びの機会に恵まれたと感じています。

(文責 嶋田暢也)